

## リオデジャネイロ・パラリンピック 大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察

遠藤華英

(日本財団パラリンピックサポートセンター)

### はじめに

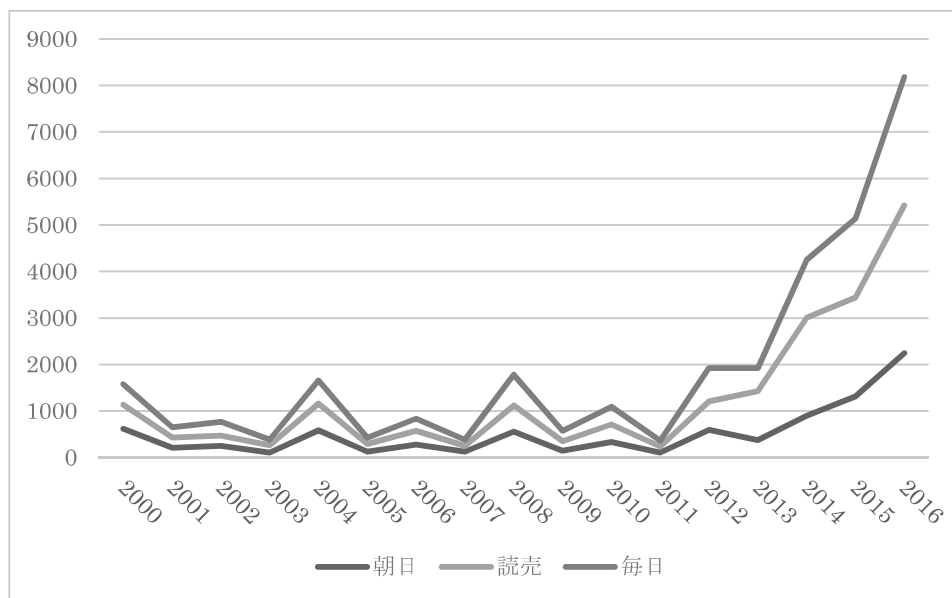
2016年9月7日から9月17日、南米初となるパラリンピック大会（以降、リオ大会）がブラジル・リオデジャネイロにおいて開催された。

近年のパラリンピックは、障害者のリハビリテーションとして実施されるスポーツというイメージから極めて競技性の高いスポーツの世界的祭典という認識が広がっているように考えられる<sup>1)</sup>。しかしながらオリンピック・パラリンピック競技大会は、どうしてもオリンピック種目に比重が置かれ、メディア露出に関しても、大半がオリンピック競技中心であった<sup>2)</sup>。しかしながら、1998年に長野県で行われた冬季パラリンピック以降、障がい者スポーツへの関心は高まり<sup>3)</sup>、2000年のIOCとIPCの協力関係の締結、2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会の開催までに段階的にパラリンピックに対する見方やメディアでの取り扱いは変わってきている<sup>4)</sup>。図1は、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞（五十音順）の各新聞社のデータベースを利用し、「パラリンピック」をキーワードとして検索して抽出された記事数の推移である。日本においては、ロンドン大会、そして2013年に決定した2020東京オリンピック・パラリンピックの開催が大きな契機となり、パラリンピックに関してそのメディアへの露出機会が飛躍的に増加しているといえる（図1）。

スポーツとメディアの関係は密接であり、メディア報道によりスポーツに関する国民世論並びに世論形成に影響を及ぼし得る<sup>5)</sup>。よってパラリンピックに関する報道は、国民のパラリンピックや障がい者スポーツについての考えや意見を構成する基礎的な材料となると考えられる。特に、パラリンピックの大会前後は報道数も増加することから、競技成績やスポーツ自体の紹介のみならず、パラリンピックおよび障がい者スポーツに関する現状や課題、将来像、社会的関心などあらゆるテーマを含んだ報道がなされると予想される。

そこで本稿は、パラリンピックに関する報道数が増加するリオ大会会期中の新聞報道

図1. 「パラリンピック」関連の記事数推移



※筆者作成

から、その報道にどのようなテーマが含まれるのか、記事の内容を体系的に整理するとともに、その報道の傾向に関して考察した。

## 1. 調査対象の選定と方法および内容の類型

本稿は、リオ大会開催前4日、開催後3日を含めた2016年9月3日～9月20日を調査対象期間とし、全国的なシェアが高い朝日新聞、産経新聞、日経新聞、毎日新聞、読売新聞（五十音順）および東京新聞の計6社の新聞記事を基に分析を進めた。

但し、大会期間中は、その大会特有のニュース、すなわち出場選手の成績や経歴、競技ルールの説明が多くなりがちであるが、本稿においては、パラリンピックそのものや障がい者スポーツ一般について、どのような点が報じられているのかを把握することが目的であるため、選手の成績や個人的な生い立ち、大会の様子の紹介に留まる記事は分析対象に含めず、作業を進めた。

研究協力者3名を含めた計4名がそれぞれ1社または2社を担当し、パラリンピックおよび障がい者スポーツに関するすべての記事に目を通し、上記の条件に該当する274件を最終的な分析対象として抽出した。パラリンピックそのものに関連してどのようなテーマが報道されているのか4名で議論を重ね、記事の内容を基に15のカテゴリに大別した。収集した記事を4名がそれぞれ各カテゴリに当てはめ、結果の妥当性およびカテ

リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察

ゴリ内の整合性を確認した。記事をあてはめる際、カテゴリ同士に内容の重複が見られる場合は、著者がカテゴリの定義を修正し、再分類した。次表には各カテゴリの定義を記載し、またそれらの報道内容としてカテゴリに含まれる記事を要約して整理している(表1)。

表1. リオ大会における報道の類型

カテゴリ	定義	報道内容	記事数*	割合(%)**
2020への提言	2020年東京大会に向けた問題提起および示唆に関する報道	東京大会の予算配分の適正化 用具・装具に対する助成制度の拡充 若手発掘, 育成や指導者養成 パラスポーツの認知と普及 団体競技の強化と育成 障害者雇用の促進 ハイパフォーマンスセンターの効果検証 競技ルールの普及と観客マナーの徹底 教育プログラムの充実 障害者スポーツ全般への社会的支援の充実 パラリンピックを通じた包摂的社会的形成 共生社会の実現に向けた一人一人の意識の変化 スポーツとしてのパラリンピックを観客が楽しむ大会づくり 2021年以降を見据えたビジョン設定 リハビリテーションの充実	68	24.8%
ドーピング	リオ大会におけるドーピングに関する報道	ロシア全面排除決定 ロシアの国内独自大会開催 リオ大会期間中の選手失格処分 ロシア選手団の今後の大会の出場について IPCとIOCの異なる裁定に関する分析・評価 過去大会出場者の違反発覚と出場停止 大会中のドーピング1500件実施	34	12.4%
人権	パラリンピックにおける障害者の権利や戦争・紛争に関する報道	難民選手の出場 フェルフルト選手(ベルギー)の安楽死についての見解 ジェンダーや経済格差を乗り越えて出場する選手 障害児を殺してしまう風習のある村から聖火ランナー輩出 紛争・内戦の被害者や元傷痕兵の参加(イラク, アフガン, ボスニア, コロンビア)	33	12.0%
予算・支出・マーケティング	チケット販売やマーケティング戦略, 大会予算に関する報道	ロンドン大会マーケティング担当幹部によるクラウドファンディング(fill the seat) 大会予算削減による大会運営への影響 歴代2位のチケット販売数 ダフ屋の防止施策	31	11.3%

カテゴリ	定義	報道内容	記事数*	割合 (%)**
事件・事故・テロ対策	大会中に起こった事件・事故およびテロ対策に関する報道	大会運営の不備、人員不足、セキュリティレベルの低さ 頻発するテロへの対策 自転車男子個人ロードレース（運動機能障害）のレース中の死亡事故	19	6.9%
日本の成績への評価・分析	今大会の日本の競技成績を受けた評価・分析に関する報道	海外の競技レベルの急速な向上と日本の強化策の遅れ 指導者の不足や競技施設の不足 開幕前に設定されたメダル目標自体への批判的見解 普及啓発や実施率向上に目を向ける必要性 メダル獲得総数ではロンドンを上回ったことへの評価 メダル数や成績が注目されたこと自体が一つの進歩 成果をメダルの数のみで評価する傾向への否定的意見	18	6.6%
バリアフリー	ハード・ソフト面のバリアフリーに関する報道	リオ大会の競技施設や会場全体のバリアフリーへの評価 障害を持った米国の全ての生徒・児童が健常者と同じスポーツ大会に参加できる法律「タチアナ法」 「心のバリアフリー」の啓発 日本において進められているバリアフリーの取り組み	16	5.8%
政治問題	パラリンピック大会期間中に起こった政治的背景を含む事象や戦争との関連を持つ選手に関する報道	ベラルーシ代表によるロシア国旗掲揚 エチオピア視覚障害陸上選手の抗議 ゴールボール・アルジェリア代表が同イスラエル代表同一到着回避、不戦敗 IOC会長のパラリンピック閉会式欠席 ブラジル大統領弾劾、内政混乱と開会式での新大統領へのプーイング ブラジル内政の混乱、開催期間中4都市でデモ発生	14	5.1%
ブラジル社会へのインパクト	パラリンピック開催によるリオデジャネイロ市およびブラジルへの影響に関する報道	リオ市内のバリアフリー化促進 市内の公園に障害者向け運動器具を設置 教育プログラムに障害者スポーツを取り入れ 障害者選手専用のナショナルトレーニングセンター設立 ブラジルの人々の自尊心向上への好影響 障害者スポーツの認知度アップ 障害者のスポーツ参加の意欲向上 障害者に対する偏見払しょくへの期待	13	4.7%

リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察

カテゴリ	定義	報道内容	記事数*	割合 (%)**
リオ大会から学ぶところ	リオ大会から日本が学び得るに関する報道	リオ大会の会場の雰囲気作り 一般の障害者のためのスポーツ環境整備 障害者のボランティア参加 「心のバリアフリー」を宿らせる教育プログラムの実施 宝くじ売り上げのブラジルパラリンピック委員会へ割り当て リオ大会に参加したボランティアへの評価	10	3.6%
両大会出場選手・記録比較	オリンピックとパラリンピック両大会に出場した選手や両大会における記録の比較に関する報道	オリンピック・パラリンピック両大会に出場する選手 マルクス・レームの走り幅跳びの記録 リオ五輪優勝タイムを上回るパラリンピック男子1500m（視覚障害）の記録 オリンピック記録に迫るパラリンピック記録の向上について	8	2.9%
技術・サポート	競技用具の製造やアスリートへの企業支援など競技環境に関する報道	用具技術の海外輸出 パラリンピック選手が使用する高額な競技用具の紹介 障害者アスリートの企業支援の状況	7	2.6%
パラリンピックの価値	「障害」に関する表現やパラリンピックの価値に関する報道	「感動ボルフ」に関する議論 「障害者」という言葉の使用に関する議論 勝利至上主義への警鐘 パラリンピックの独自性や価値に関する議論	6	2.2%
参加国全体のメダル数・獲得率・独占率	各国のメダル獲得率や配分に関する報道	大会の全体的な競技レベルの向上 ロシア不参加によるメダルランクの揺れ 中国や一部の国のメダル量産について	5	1.8%
教育・体験イベント	パラリンピックや障害者スポーツの普及・啓発に関する報道	パラスポーツ体験会の紹介 「オリンピック・パラリンピック学習ノート」の発行 小中学校における障害者スポーツに関する取組みの紹介	4	1.5%

\* 1つの記事に複数の内容を含む場合もあるため、記事数の総計は274を上回っている。

\*\*パーセンテージは、274記事を分母として割合を算出している。

## 2. 考察

### 2-1. パラリンピックにおけるドーピングに関する報道と国際政治に関連する出来事

パラリンピックにおけるドーピングに関する報道については、大会出場資格の停止を

受けたロシアの動向に関する記事が目立った。パラリンピック大会開催以前から、ロシアの組織ぐるみのドーピング発覚と、その処分に関わる動向について報道されていたが、特に IOC と IPC によって異なる裁定が下されたことを受け、パラリンピックに関連した記事の中で多く報道されたと考えられる。パラリンピックがオリンピック同様に、世界におけるスポーツのメガイベントとしての地位を確立しつつある昨今、勝利によるインセンティブは増しており、これまでのオリンピックが抱えてきたドーピング汚染等の問題がパラリンピックにおいても表出する恐れが指摘されている<sup>6)</sup>。今回のリオ大会においても、ドーピングはオリンピックに限る問題ではなく、パラリンピックでも対応を迫られる喫緊の課題として改めて認識されるとともに、このような状況を招くような背景についての議論が行われるようになった。

またロシアの出場停止はドーピングの問題だけではなく、国際政治問題としての様相を覗かせている。ロシア側は IPC の裁定に対し、「政治的な判断」として批判をしている<sup>7)</sup>。一部の報道によると、パラリンピックの出場停止がロシアにおいては、ドーピングの問題というより、政治的な問題として捉えられている傾向にあるという<sup>8)</sup>。そのため今回のドーピングの問題は、スポーツにおける問題を発端として、政治問題へ発展するという側面がパラリンピックにおいて垣間見えたケースといえる。

## 2-2. 各国のメダル獲得状況と開催国ブラジルへの言及

パラリンピック強豪国ロシアの不参加、各国のメダル獲得レースにどのような影響が生じるかという観点からの報道がなされたが、メダルの獲得状況を伝える報道においては国際的な競技レベルの向上と結びつけられ報じられることが多く、特に中国やイギリスなどの一部国家によるメダル量産が中心となっていた。

また開催国ブラジルも金14個、銀29個、銅29個の合計72個のメダルを獲得し、ロンドン大会の43個から躍進を遂げたが、このブラジルの躍進には、6月に設立された障害者専用ナショナルトレーニングセンターや宝くじの売り上げをブラジル・パラリンピック委員会に割り当てる措置<sup>9)</sup>など、制度面の改革による資金分配や練習環境の変化が影響しているとの趣旨が報じられていた。一方で、国際競技力向上に資する他の側面<sup>10)</sup>、例えば選手の発掘・育成や指導者や審判などのサポートにあたる人材の育成、さらには引退後の選手のキャリアサポートの取組みについてほとんど報じられてはなかった。ブラジルに関する報道においては、パラリンピックの成績向上に関連する環境面や制度面の変化よりはむしろ、観客やボランティアの好意的な雰囲気や多様性について寛容な国民性などソフトの側面についての報道が目立ち、その点を日本が学ぶべき箇所として伝えられる傾向にあった<sup>11)</sup>。大会開催前から政治状況の混乱や治安、また大会開催による

経済的負担など懸念事項が多くあったリオ大会であるが、ソフト面に力点が置かれる形で、大会開催によるブラジル社会への影響はおおむね好意的かつポジティブに報じられる傾向が強く、負の側面についての言及はあまり見られなかった。

### 2-3. 日本の成績への反応と課題の提示

パラリンピック大会日程の前半では、金メダル10個の目標とその達成への期待が報道されていたがその目標の達成が難しいと明らかになった後半には、金メダル目標に関する報道は少なくなり、日本の競技力向上についての課題への言及が増えていった。特に海外勢が障がい者スポーツ強化施策を講じ、競技成績を向上させている一方、日本の金メダル0個という結果が対照的であったが、全体的な傾向としては、大会成績や競技結果についての日本選手団に対する批判的報道は見当たらず、障がい者スポーツに関する現況についての分析と、それらを踏まえて今後解決すべき課題を提示するという論調が強く、またロンドン大会に比べてメダルの総獲得数は増加したことに対して評価する記事も多く見られた。

具体的な課題としては、選手の練習環境やサポートの不足、専門知識を有する指導者や審判の不在など環境面や制度面での強化策の遅れとともに、そもそも障害の有無に関係なく、スポーツに参加できる基盤自体が不十分であることを指摘する報道もなされていた。選手個人の努力にのみ任せる構図に対して、国家のスポーツ政策としてトップの育成と草の根の普及・啓発の両軸について日本の対応を迫る記事が多く見受けられた。同時に障がい者スポーツに関する2020年までの議論のみならず、障がい者のリハビリテーション環境の不足、障がい者の社会統合への取組みと課題に関する記事などパラリンピックを通じた障がい者全体に関わる問題を提示する記事もみられた<sup>12)</sup>。

今後日本が国際競技力をどのように向上すればよいかという強化の側面に触れた記事がある一方で、勝つことだけがパラリンピックではないという見解も目立ち、メダルの獲得数のみを評価することへの懸念やパラリンピック自体の価値に関する議論もあった。

### 2-4. パラリンピックの価値と障害の報じ方について

前項でも述べた通り、パラリンピックにおける報道においては、勝負のみですべてを判断することを嫌う側面があった。ドーピングの問題にも関連するが、オリンピックがこれまで経験した負の出来事にパラリンピックも追随するのではないかという焦燥からか、勝利至上主義への警鐘をならすものもあった。特に「より速く、より高く、より強く」というオリンピックのモットーとは違うパラリンピックの独自性に目を向けるよう喚起する記事も見られた。

しかし全体としては、パラリンピックとはそもそも何か、パラリンピックの価値とは何かについての議論は、リオ大会の報道に関する限り、十分ではない面があった。

### 3. おわりに

リオ大会に関する報道については、概ねリオ大会を好意的に評価する点が主に報道されていたといえる。また同時に2020年東京大会を強く意識した形でパラリンピック選手たちの競技環境改善と裾野の拡大のための問題提起がなされていたと感じられる。

しかし日本の成績やメダル目標に関する評価も記事によって意見が分かれるように、スポーツとしての競技性と、障がい者の社会統合を進める機会としてのパラリンピックという両軸を報道することのバランスは、各社の報道に若干の葛藤が垣間見えた。パラリンピック報道は、障がい者と社会との関わりについて国民全体が考える機会を与えるという期待があるだけに、2020年までの短期間のみならず、その報道量や報道内容が2020年以降もどのような変遷をたどっていくのか継続的な研究が求められよう。

#### 注

- 1) 高橋明 (2004) 「パラリンピックとは」『障害者とスポーツ』, 岩波新書 : 147-162.
- 2) 山口志郎・高松祥平・石澤伸弘・山口泰雄 (2015) 「カナダにおける障害者スポーツの可能性 メガ・スポーツイベント開催に向けて」『生涯スポーツ学研究』, 11 (2) : 22.
- 3) 藤田紀昭 (2008) 『障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か』, 角川学芸出版 : 東京, 17.
- 4) Athanasios (Sakis) Pappousa, Anne Marcellinib and Eric de Le'se'leucbFrom (2011) Sydney to Beijing: the evolution of the photographic coverage of Paralympic Games in five European countries: Sport in Society, 14, (3) : 345-354.
- 5) Robert M. Entman (2007) Framing Bias: Media in the Distribution of Power: Journal of Communication, (57) : 163-173.
- 6) Legg, David (2011) The Paralympic Games and 60 years of change (1948-2008): Unification and restructuring from disability and medical model to sport-based competition. Sport in Society, 14 (9) : 1099-1166.
- 7) たとえば2016年8月29日『東京新聞』朝刊「リオ・パラリンピック除外のロシア 代替大会の開催検討」
- 8) 2016年9月19日『東京新聞』朝刊「反ドーピングの本気度は？ロシア根強い [欧米陰謀論]」
- 9) たとえば2016年9月20日『読売新聞』朝刊「リオ・パラリンピック ブラジル メダル数で躍進 法整備で支援体制充実」
- 10) De Bosscher, V., De Knop, P., Van Bottenburg, M., Shibli, S. A (2006) Conceptual Framework for Analysing Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success. European Sport Management Quarterly, 6 (2) : 185-215.
- 11) 2016年9月20日『産経新聞』朝刊「[アギトス] おおらかな愛国心」
- 12) 2016年9月5日『読売新聞』朝刊「車いすバスケット熱く」



# Newspaper Reporting on the Rio Paralympic Games: A Trend Analysis and Study

Hanae ENDO

(The Nippon Foundation Paralympic Support Center)

As seen from the growth in the scale of the event and the increase in the level of competition of its participants, interest in the Paralympics is catching up to that in the Olympics, and step by step, the way that the Paralympics are seen and how they are treated by the media have been changing.

There is a close relationship between sports and the media, and monitoring how the media reports on sports not only brings to light different issues related to the Paralympics, but is also useful for exploring the public's interest in and perspective on the event.

In this article, four researchers have analyzed newspaper reports during the Rio Paralympics, systematically organizing them under fifteen different categories, and examining the contents and trends in the reports.

Reports on doping in the Paralympics were prominently about Russia, following the ban on Russian participation in the Games. The cyber-attack on WADA and the display of the Russian flag by the Belarus team were a glimpse of how what began as a doping issue developed into a political one.

Reports on the winning of medals focused on the increase in the international level of competition and the medal tallies of several countries. Reports on the advances made by the host nation Brazil noted institutional improvements which led to changes in funding allocation and in training environments. However, little mention was made of measures to improve Brazil's level of competition in international sports, and reports focused more on lighter topics such as the friendly atmosphere among tourists and Games volunteers, and the open-mindedness of the Brazilian people. Overall, there was a tendency towards reporting to be favorable and positive.

During the second half of the Paralympic Games, there was less discussion of gold

medal targets, and more mention of issues for improving Japan's level of competition in international sports. The general stance was not to criticize Japanese athletes for failing to win gold medals, but to report on the current situation of disability sports and the issues it faces. The prevailing view was that the Paralympics are not just about winning. There was concern expressed about evaluation based solely on the number of medals, and discussions on the value of the Paralympic Games itself.